

根鉢の長さを5センチに短くしたコンテナ苗(右)と従来の15センチのコンテナ苗(中)と裸苗=県庁



植栽コスト $\frac{2}{3}$ コンテナ苗

ヒノキ、3年以内に実用化

県森林研

県森林研究所は、従来の3分の2程度に植栽コストを抑えたヒノキのコンテナ苗を開発したと発表した。木材価格の低迷で伐採後の再造林の費用を捻出できない課題に直面していたが、低コスト化で課題解決に期待が高まる。研究所は3年以内に実用化し、100年先の森林づくりを進めたいとしている。

コンテナ苗は、型崩れしにくい円柱状の専用プラスチック

容器に培養土を詰めて育てる根鉢のある苗。

畑で生産する裸苗は根がむき出しで乾きやすく植栽の時期が限られていたが、コンテナ苗は植える時期を選ばず、根付いて成長する「活着」が裸苗よりも高い利点がある。県内では5年ほど前から導入されているという。

県内はヒノキの育成に向く急傾斜地が多く、流通するコンテナ苗の根鉢は深さ15センチ

で

急傾斜地では穴を掘る手間がかかり植栽の効率が悪かった。

研究所は深さ5センチの根鉢を作り、ヒノキの苗を育てて検証した。県の規格を満たす樹高に成長し、15センチの根鉢と比べて穴を掘る時間を半分近くに短縮できた上、活着やその後の成長にもほぼ影響はないことが分かった。植栽費も裸苗程度に抑えられるという。研究所の担当者は「苗の生産者の増加にもつなげたい」としている。

(松田尚康)

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期限:平成31年7月31日
この記事は岐阜新聞社の許可を受けて掲載しています。